

はくさんちゅう

柏三中だより

教育目標：豊かな心をもって 自ら学び鍛える生徒



三中魂

(挑戦・忍耐・協力)

第284号

柏崎市立第三中学校

保護者配付 令和3年2月26日(金)

地域回覧 令和3年2月26日(金)

〒945-0845 柏崎市新赤坂一丁目2番10号

☎ 23-2821

FAX 20-4413

E-mail daisan@kenet.ed.jp

「雪が解けると…何になる？」

校長 上野 忠 英

先ずは、次の小説の書き出しをお読みください。

ぶどうつる ひさおじゅうらん
(「葡萄蔓の束」 作 久生十蘭 より)

雪国の春は、雪も消えないうちにセカセカとやって来る。何もかも一口に頬張ってしまおうとする子どものようだ。落葉松かからまつの林の中は固い雪でとじられているのに、その梢つぐみで鶉うわかわが鳴く。低く垂れ込めていた鈍重な雪雲の幕が一気にひきあげられ、その後ろから一面浅みどりの空が顔を出す。雪の表面が溶け、小さな流れをつくって大急ぎで沢の中へ流れ込み、山壁や岩の腹についていた雪は大きな塊になってあわてふためいて谷の底へ転がり落ちる。藪陰やぶかげにはスミレ。雪解けの沢水の中には、のそのそと歩きまわるザリガニ。丘はまだ斑まだらゆき雪で蔽おおわれているのに、それを押しつくしのけるようにして、土筆が頭をだす。去年の檜のびるの枯れ葉を手中ひぼりで拵ひぼりえば、その下には、もう野蒜の緑の芽、風はまだ身を切るように冷たいのに、早春の高い空で雲雀が気ぜわしく鳴く。なにもかもいっぺんにやってくる春だ。



雪国の春の訪れを表現した一節です。中学生には難しかったでしょうか。ゆっくりと読みながらイメージしてみると、春の気配を感じることができると思います。小説などを書く人は、並外れた感性や繊細なものを見方が生まれながらに身につけているかのように、文字だけで見事に情景を思い描かせてくれる才能があるのですね。

この冬は、大雪や強風に悩まされた私たちの生活でした。しかし、2月中旬を迎えた今は、間違いなく春が近づいていることを感じられるようになってきました。厳しい冬であればあるほど、春の到来は待ち遠しくうれしいものです。

春は、新しい生活への旅立ちを想像させてくれます。卒業式は、まず一番にそれを想像させてくれる儀式でしょう。三中においても3月8日に、その日を迎えます。3年生はその日を境に卒業生となり、義務教育を修了するとともに、新しい世界への希望にあふれた出発の日となります。令和2年度の学校生活は、決して順調に過ごせた日ばかりではありませんでした。だからこそ迎える卒業式は、春を待つ気持ち同様、何倍もの喜びになるのではないかと思います。

さて、表題の「雪が解けると…何になる？」ですが、普通は「水」となると答えるでしょう。それは正解です。

しかし、小説家のような気持ちになって「雪が解けると…春になる」と言えるような感性と多様なものを見方を身につけたいものです。

まぶしい陽の光あふれる春はすぐそこです。三中生全員にとって、希望に胸膨らむ春の訪れとなるよう祈っています。

